

大学教育研究センターでは、広島大学卒業生に対する調査を行い、その結果をいま分析している。いずれ報告書にまとめ、学内でもこれに関連した研究会を行う予定とのことだが、ここではその概要を紹介してもらった。

## ●なぜ卒業生調査力●

なぜ今、卒業生調査を企てたのか、その背景を説明しておかねばならない。

話は、少し大きさにいえば、大学教育の理念とかかわる。ここで「理念」というのは、哲学的な理念のことではない。むしろ大学での教育が学生にどのような影響を与えるべきなのか、といった具体的な問題だ。

大学の役割の根幹にあたるにもかかわらず、このような問題は、これまで日本の大学ではあまり体系だてて考えられてきたとはいえないのではないだろうか。それは大学教員の発想の基本が、やはり研究にあったことと深くかかわっている。また最新の研究成果を伝え、またその過程に参加させることこそが、むしろ最良の教育となるとすれば、「教育」について改めて考える必要もないことになる。

しかし、大学をとりまく環境は急激に変化しつつある。実際、一般教育課程の再編や、大学院

改革が全国の大学で進んでいるし、広島大学もその例にもれないことは周知のとおりだ。そのような改革の目標をどこに求めるのか。そうしたコンテクストで改めて考えてみると、大学の教育面での理念をもっていないことが一つのネックとなっていることに気づく。

しかも、ここで必要とされる理念は、一般的・抽象的に考え出されるのではなく、広島大学独自の個性を踏まえて、しかも他面的に検討されなければならない。もちろん各専門分野において固有の学問の論理から、教育課程をみなおすことも重要だが、広島大学全体としての教育機能、そして広島大学と社会とのかかわりを含めて、広い視野からの、理念的検討と客観的な機能分析も必要だろう。

その一つの視点として、広島大学が卒業生にどのようなインパクトを与えてきたか、という点が位置づけられる。卒業生を、いわば一つの鏡として、広島大学の教育の実際とその在り方を考え直す、一つの契機とする、ということになるのか。

## ●調査の概要●

具体的には、卒業生にかんじて次の点を明らかにすることを目標とした。即ち、

(1) 卒業生がどのような経路を

## 卒業生からみた広島大学の教育

【調査を終えて】

大学教育研究センター ◆ 金子元久



### プロフィール

(かねこ・もとひさ)

- ◇昭和二十五年生まれ
- ◇専門は日本及び外国における高等教育の経済学的分析
- ◇十月一日付で東京大学へ転出し、現在、併任助教

をたどっているか、また業務上でどのような知識・技能を必要としているか、そして

(3) 現在どのような教育訓練に対する要求をもっているか、また広島大学在学中にうけた教育についてどのような意見をもっているか、である。

このため、卒業生に対する郵送のアンケート調査を行った。対象としたのは、全学部（医学部、歯学部を除く）の、一九七八年、一九八〇年、一九八三年、一九九二年（各年三月）の卒業生約二万五千人である。卒業生住所の確認にご協力を頂いた各学部の担当の方々にお礼申し上げる次第である。

これをもとに、卒業年次・学科単位で、約三割を無作為抽出し、計七千四百人の調査対象者に調査票を、昨年十二月に郵送した。あて先不在で差し戻されたものが約七百通、二月末までに回答があったのが二千九百人であった。実質回答率は、四三%となった。

なお広島大学における調査と

並行して、日本労働研究機構を中心として、全国で三十五の国公立大学の卒業生、約五万七千人を対象として郵送調査が行われている。広島大学卒業生については、独自の集計・分析を行っているが、必要に応じて、この全国サンプルとの比較も行ってみたいと考えている。

## ●卒業生の反応●

調査の内容は多岐にわたるもので、その分析結果を限られた紙面で紹介するのは難しい。とりあえず、目立った点をあげるとすれば次のようになる。

第一に、卒業生が職務上に最も強く感じる知識技能向上のニードは、職業に直結した具体的な専門的知識よりも、まず対人関係の能力や説得力にあった。

このような能力は、大学教育と直接に関係がないようにみえるが、むしろ大学教育を通じてこそ得られる、幅広く深いコミュニケーションの能力もあると考えられる。また大学教育のあり方について様々な項目のうち、「少人数の教育形態による、発表や論文の表現技法の教育」を強化するべきだとする意見が最も多かったが、この点に対応するものといえよう。

第二に、教育内容について、理論性と実務性に関連する質問にたいしては、両者のいずれ



も絶対的ではなく、むしろ「理論的な教育による論理的・体系的な考え方の習得」を強化するべきだとする意見が、学部を通じて多かった。

また理科系のみならず、意外にも文科系においても、大学院への進学への興味が少なくなかったが、文科系、理科系を通じて、大学院教育の意義として、特殊な知識、資格の獲得よりも、「幅広い、体系的な発想をみにつけるには役立つ」があげられていることも、これに関連して注目される。

第三に、大学での教育の経験についての卒業生の評価は概ね厳しいものだったが、特に一般教育に対する評価が、学部を問わずきわめて評価が低かった。

だからといって、一般的な教養の価値自体を否定する意見は少ないのが明らかとなった。また職務上に要求されるものとしても、幅広い教養をあげるものが多かった。

以上のような傾向は、実は広島大学だけのものではなく、全国サンプルについてもほぼ同様だった。ただ、**広島大学固有の問題**もいくつか指摘できる。

一つは広島大学の伝統の中核をなしてきた教員養成機能にかかわる。すなわち教育学部、学校教育学部、文学部、理学部卒業生には、教職につくものが非常に多かったのに、それがここ十年ほどで急速に減少している。

そして、教職についたものと、そうでないものとの間に、広島大学での教育の評価について、大きな相違があり、教師にならなかった卒業生は、かなり大きな不満をもっていることが明らかになった。

もうひとつは、特に工学部、理学部、生物生産学部では、大学院進学者が急速に増大しており、大学院が新しい広島大学のアイデンティティとなるようにしているようにみえる。そして大学院入学者の間では、学部時代の教育に関しては肯定的な評価がみられる。しかし逆にいえば、大学院に進学しなかったものは、学部教育についてさまざまな点で問題を感じていることが示された。

これら二点は、急速に変化する環境の中で、広島大学の学部教育の理念・目標と、現実の教育機能との間で、かい離が生じつつある一つの反映とみることはできないだろうか。ただ、以上のような短い紙面では意の伝わらないことも多いし、データの解釈などについて、異論のある先生方も多いことだろう。当センターではこれから調査の結果についてさらに分析を進めるとともに、その過程で、学内での研究会を行い、各学部の先生方のご意見をうかがいたいと考えている。ぜひ積極的な参加をお願いしたい。

(かねこ・もとひさ)

## 自由記入の一部

ここではあえて厳しい意見のみを選んだが、卒業生の感想には好意的なものも少なくない。主な回答を学部別に編集し、資料集として発刊する予定なので、興味がある方は一読をお薦めする。

■ 企業についてももう少しガイダンスが欲しい。教員採用試験に偏りがちな指導は避けて欲しいと思う。

(文系、九一年卒、女)

■ 学部は就職に関しては何もしてくれない、の印象です。地方大学の女子学生が東京で就職するにあたって、まず何をすればいいのかさえ分からなく、何もかもが手探りの状態でした。また、自身の責任でもあるのですが、会社で働くということについてよく分からないままに就職したので、最初の会社で働くことができなかったり、辞めてしまったと思っています。大学の時に少しでもそれを知っておけばよかったです。先輩の話やチャンスをなども欲しかったです。とにかくあまりにも情報が不足していて、相談できる人もいない不安感を解消して欲しい。大企業に就職

できたのは、結局サークルの先輩などのつてがあった人だけという事実をもっと真剣に考えて下さい。大学はもちろん、研究・教育の場ですが八〇％超の人は企業に就職したりして、研究者にはならないのですから。

(文系、八六年卒、女)

■ 大学入学当時は、学部・学科を選択した理由、及びその適性につき、きわめて流動的であり、三年生時に、自由に他学部、他学科に編入できる制度、もしくは一・二次には学部・学科を決定しない制度に移行すべきだと思う。何も分からぬ高校の時に決断したことをその後もFIXさせてしまうことは、人材活用の面でマイナスだと思う。

(文系、七八年卒、男)

■ 学生が勉学に対して不誠実なものも問題だが、下手でおもしろくない授業を何年も繰り返している先生も問題だ。そして、産業界からの要請を正面から見直さないと、大学は社会から孤立した世界を作ってしまう。

(教育系、九〇年卒、女)

■ 学部には、就職を相談しようとしても一般就職の資料がほとんどなくて、総合科学部の資料を見せてもらったりした以外は、ほとんど自分で本(受験ジャーナル)「日経アドレ」等を買って、会社に直接資料請求

をした。周囲が教員採用試験を受ける人ばかりで、一般就職の希望の学生は他大学に比べて活動が遅くなりがちなので、早めの指導がほしかった。

(教育系、九二年卒、女)

■ 大学の授業そのものを見直す必要がある。退屈な授業ではダメだ。学生にも厳しさが必要だが、教える方も自己反省すべきだ。

(教育系、七八年卒、男)

■ 教員・公務員になる人は少数にもかかわらず、就職指導が行われていませんでした。そのため一般会社への就職は、学校経由で応募する人はいませんでした。これでは、特に女性には不利です。後輩の方へはフォローしてあげて下さい。社会人(卒業生)が、再度学習できるような場を作りたいです。

(教育系、九一年卒、女)

■ 自分の研究のみで、学生の指導を全く行わない教官がいる。そういう人はたいいていの場合「学生の自主性」という言葉を隠れみのにしている。右も左もわからない学問の海で「自主性」ばかり強調されても身動きがとれない場合が多い。怠学といわれればそれまでだけど、今の受験教育を受けている者には本当に何をしたいのかわからなかった。今高校の現場で、「放